



2024年5月29日

日 本 銀 行

## パイロット実験での「学び」

(中央銀行デジタル通貨に関する連絡協議会 (第7回) における開会挨拶)

日本銀行理事

加藤 毅

本日は、中央銀行デジタル通貨（CBDC）に関する連絡協議会にご参加頂き、誠にありがとうございます。

私は、今月よりデジタル通貨を担当することとなり、今回、初めて参加させて頂きます。皆様どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、日本銀行では、昨年4月から、CBDCのパイロット実験を行っています。パイロット実験は、2本の柱からなっています。柱の1つは日本銀行における技術的な実現可能性の検証で、もう1つが「CBDCフォーラム」です。これらの2本の柱は密接不可分であり、両者の検討成果は、それぞれの作業にフィードバックされます。

パイロット実験はこれまでのところ、順調に進んでいます。皆様からご支援、ご協力を頂いておりますことを、この場をお借りして改めて厚く御礼申し上げます。本日は、パイロット実験を進める中で私どもが感じたことを3点、申し上げたいと思います。

第1に、手を動かすことからの学びです。昨年3月までの概念実証では主に中央システムの台帳部分を実験対象としたのに対し、パイロット実験では中央システムからエンドポイントデバイスまで対象を拡大し、実験用システムを構築します。もちろん、実験ですので、社会実装を想定した場合とまったく同じ性能等を追求するものではありませんし、検証を効果的に行うため、複数の選択肢のうちあえて複雑なものを選んだ部分もあります。もっとも、実験用システムという「モノ」を構築するために、一定の要件を置く作業は、CBDCに期待される特性 — 民間企業が発行するマネーとの役割分担、イノベーションの促進、そしてプライバシーの尊重といった特性が実現できるような設計の、より精緻な検討に繋がっています。

第2に、多様なバックグラウンドの方とともに議論することからの学びで

す。「CBDCフォーラム」には全部で64社の、リテール決済やそれに関わる技術に携わる多様な事業者から、実務を担う方々にご参加頂いています。現在、5つのワーキング・グループでテーマ毎に議論を進めていますが、そうした中で改めて明らかになっていることは、CBDCは、決済システムやマネーとしてのCBDC単独で完結するものではなく、それを取り巻くアレンジメントやエコシステムとの関係の中で形づくられるものだということです。例えば、外部インフラ・システム等との接続、追加サービス、KYCとユーザー認証・認可といった点について、実務を踏まえた闊達な議論が行われていることは、とても喜ばしいことです。

最後に、新たな技術に関する学びです。CBDCが、安定的な決済を行う基盤であるとともに、豊かなエコシステムを形成する基盤であるためには、様々な技術の可能性について予断を持たず、オープンな姿勢で、かつ冷静に評価する視点が必要です。またCBDCは、未来においてもこうした役割を果たし続けるべきものです。技術面の探究では、それがいま成熟しているかという視点だけではなく、将来有望な技術であるかという視点も必要ですし、先行きの技術発展の可能性を意識した、柔軟性のある枠組みであることも求められるでしょう。「CBDCフォーラム」では、API技術や新たなデータベース技術等についても議論していますが、技術に対する確かな知見に立脚した、質の高い議論が行われていることは、大変有益なことです。

引き続き、皆様のご経験とご知見を拝借しながら、CBDC、さらには決済システムの将来像を考えていきたいと思っております。ご協力よろしくお願いたします。

ご清聴ありがとうございました。

以 上